

1 総評

九州国際大学は、「塾的精神」と「北九州の地域に立脚」というユニークな大学の基本理念を掲げ、義務的ではなく大学改革及び教育改革の観点から積極的に活用する姿勢で自己点検・評価を組織的・体系的に実施し公表している。また、大学独自に設定した基準（基準 A 地域社会貢献、基準 B 国際交流）による自己評価は、九州国際大学ならではの建学の精神・基本理念に直結するものであり高く評価できる。さらに、平成 24（2012）年度に導入された外部評価により、大学評価の公平性・透明性が制度的に担保されている。

「自己点検・評価報告書」の公表は、非常に重要である。その公表の意義とは、①質保証の対象となる学生及び入学志願者に対して大学としての学びの内容と水準を提示すること、②大学が公益活動を担う社会的存在として社会に対する説明責任を果たすことである。それゆえに、その報告書についてはオリジナル版の公表だけでなく、資料として要約版を作成し、図表を添付するなどの工夫が望まれる。情報公開の対象は、大学関係者ばかりでなく学生や保護者ひいては国民であり、読みやすく理解しやすいものにする必要があるからである。

大学の質保証の観点で気になるのは教員の質保証である。授業科目の改善・改革を推進するために「授業アンケート」の実施並びに「教員コメント」の作成を行うなどの仕組みがあり、それらの点が評価できるが、教員評価の実態が報告書からは読み取ることができなかった。教員に過度のプレッシャーを与えるのも問題ではあるが、よほどの不祥事でもない限り、その職が安泰という状況は今後改善の余地があると思われる。従前に比べ飛躍的に改革が進んでいると思われるが、「教員の評価」＝「大学の評価」といっても過言ではないからである。

「基準 1. 使命・目的等」について

①使命・目的等

報告書の中に、「塾的精神」に基づいた教育の実践等の記載が多く、建学の精神が教職員に浸透していることが窺える。

「3つの方針」（アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー）が制定されており、これらの方針に基づいて教授方法（例えばアクティブラーニングの導入）等の工夫していることは十分に理解できた。しかしながらその効果については、記述が薄いので記載の充実が必要と思われる。

「基準2．学修と教授」について

①学生の受け入れ

多様な個性を持った入学志願者を受け入れるため、推薦入試や AO 入試を重視し、一般入試・センター利用入試との比率が 7：3 となっているが、この比率を見直す必要はないのであろうか。学生の学力等の劣化現象が進行しており、推薦入試や AO 入試がその一因とも言われているからである。もっとも、入学選考の方法に関係なく、入学後の教育次第で見違えるように成長することも十分に考えられるので、新設された「基礎教育センター」の活動を含め、入学後の教育の充実に期待したい。

また、近年の入学者数の減少が気になる点である。特に、経営学科と国際関係学科については、今後のどのような教育を展開するのか特色を出す必要があると思われる。

②退学者への対応

直近 4 年間（平成 22（2010）－25（2013）年度）の退学者及び退学率が減少傾向にあるのは、真剣な教育改革や学部の授業改善、ゼミの指導体制の強化といった努力の成果であり、退学を学生個人の問題とせず、教育の仕組み、指導の在り方と考えた対応は評価できる。

③教育支援体制

オフィスアワー制度、スタディスペース設置、SA（Student Assistant）の配置などきめ細かく教育支援の体制が整備されている点は評価できる。また、高校卒業生の 2 人に 1 人が大学に進学する時代にあり、学生の基礎学力の低下を考えると、「基礎教育センター」の設置（平成 26（2014）年 4 月 1 日付）は、時宜を得ておりその効果に期待したい。

④教職課程

教職課程については、附属高等学校や附属中学校と連携し、教職課程履修者の履修体制を強化して、強みとすることができるとと思われる。

「基準3．経営・管理と財務」について

①コンプライアンス（法令等遵守）

「行動規範」を制定している点は評価できるが、いつでも見れるようにしておくことが大切である。そのためには、例えば、携帯できるようにカード形式にしておく等の施策が効果的である。スマートフォンの携帯が当たり前の昨今、アナログ思考と言われそうであるが、身分証明書と一緒に常時携帯することにより、自然に身に付く効果がある。

社会のどの組織においても、特に大学においては、「行動規範」の徹底とコンプライアンスの強化は重要である。

②学長の適切なリーダーシップの発揮

学長のリーダーシップの発揮が、大学改革と教育改革にとって非常に重要であるとの強い認識から、学長の下に新たな組織「教育改革推進会議」を平成 25 (2013) 年度に発足させたことは評価できる。日本型の会議は、ともすれば生産性の低い会議に陥りがちであるが、学長のリーダーシップの発揮により、活発な議論が展開されているようである。今後の成果に期待したい。

③理事長と学長の連携

理事長、学長の固有の権限に基づき役割を果たしている。一方で、「法人運営会議」において常に経営と教学における課題と問題を共有しており、その解決に取り組んでいる。このことは、当たり前のようであるが、実際には難しい。本学の全教職員が二人のリーダーの姿勢を見ているからこそ、一丸となって問題解決に取り組むことができている。

「基準 4・自己点検・評価」について

①自己点検・評価

原則として毎年、自己点検・評価活動を行っており、PDCA サイクルが十分に回っていることが確認できた。「教育改革推進会議」との連動により、さらなる成果に期待したい。

「使命・目的等に基づき独自で設定する基準」について

①地域社会貢献（基準 A）と国際交流（基準 B）

世の中はグローバルの時代であるが、一方でローカルの時代でもある。九州国際大学はこれらを同時に実現することを目指している。北九州から世界に発信する様々な活動を展開しており、それが地域社会貢献にもつながり、国際交流活動の推進にもなっている。九州国際大学ならではの、ユニークでオリジナルの取り組みに今後も期待したい。

平成 26 (2014) 年 5 月 19 日

九州国際大学外部評価委員会

委員 梅本 静一 (元北九州市教育委員会教育次長)

委員 神代 明 (元北九州市教育委員会教育次長)

委員 加賀美 清之 (TOTO 株式会社顧問)